

---

# 愛しい人

美湫 穂羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛しい人

### 【Nコード】

N4887H

### 【作者名】

美溪 穠羅

### 【あらすじ】

明は売春婦をしていた。そんなある日、ヒロに出会った。だが、亡くなりまた1人ぼっちに。彰と出会い一緒に住んでいく。友達が自殺し、悲しみに暮れる。そして、彰に告白された。彰といる内にヒロと行動が似てきて、彰の正体が暴かれる！！！！番外編書いてます！

## 1話

「またな」

「うん」

お金を貰い、別れを告げる。毎回の事で馴れてきた。ケータイを開けるとまだ6時だ。今日は、こいつだけだったから良かったけど、連続は正直つらい。かと言って1人だけだと収入が減る。

「家に帰るか…」

誰もいない細い道をひたすら歩くとコンクリートとマンションがある。

5階が私の部屋。

未成年ながら、1人暮らしでお客に買ってもらった。広いしペットも飼えるし一石二鳥だ。私には、家族なんか必要ない。代わりに子猫達が出迎えてくれる。この瞬間だけ癒され、今までの事を忘れさせてくれる。正直金はかかるが可愛いから許す。子猫達がいとも金は足りるし、困ってない。インターネットもあるし助かっている。

「明日は、学校か…」

今の自宅から遠いから送り迎えはお客の同じ学校の彰だ。  
仕事の時会って学校が同じで家も近いと言う訳で4つも上だからさ  
すがに浮いてる。校則違反も日常茶飯事で一応退学ぎりぎりだが、  
彰の親が守ってくれている。彰の親は政治家だから正直助かってい  
る。私も茶髪にピアスだから浮いているだろう。彰も同じく金髪に  
ピアスしていて他人から見れば問題児と言う訳だ。ケータイを開く  
とメールが貯まっている。全部客だか。電話が入った。

「もしもし？」

「俺だけど、学校行けるか？」

「彰は、心配しすぎ」

「それなら、いいけど」

「じゃーね」

「明日、寝坊するなよ」

「あいよ」

いつものように、こんな会話が2ヶ月続いている。彰は受験勉強し  
たらいいのに…。ご飯作って寝るか…。

子猫達にご飯と水をあげて、片づけて1日が終了。自分は、風呂入って明日の準備をして寝るだけ。明日からは、学校が始まるから終わり次第仕事の始まりだ。明日は、担任の渡辺と副担の三宅と寝なくてはならない。宿題の回答を貰い、金を収集しなくては。

「おやすみ…。ヒロ」

## 2話

初めて出会ったのは、去年の今頃だった。ヒロとは、SNSで出会い、客として会うつもりだった。会ってみると、客とは違いいかにも女遊びをしてそうだった。実際は、子供で可愛かった。こんな感情を抱いたのは、セフレをした時以来だった。普通にデートして、自分は少し可笑しかったのだと思う。

「もしも、好きって言ったら付き合ってくれる？」

自分は、売春婦と言わねまま告白してしまった。初めての……。その日以来学校帰りによく会い、付き合ってくれた。

自分の誕生日の日、事件が起こった。

彰の彼女とヒロが乗った車が事故に遭い、亡くなってしまった。正直、なんで他の女と一緒に死んだのか……。？簡単だった。浮気には違いないと。そして、彰と誓った。人を愛さないと。そして、誓いにピアスを1コ開けて、ミサンガをした。2人同時に。そして、遺留品が渡された。箱の中に手紙と指輪。手紙には、

「明へ　誕生日おめでとう。俺と結婚してくれ。」

正直驚きと悲しみが込み上げてきた。

その日以来、指輪をはめ、ヒロのピアスやネックレス、ケータイを必ず持ち歩いている。身につけていると言った方がいいのかもしれない。

ない。その日がきつかけで売春婦にもどり、彰も同じ手紙を貰い、  
売春夫として復習を試みた。2人には悲しみしか残っていなかった。  
事故を起こした、おえらいさんを殺すために一生懸命なのだった。  
そのおえらいさんが彰の親とも知らずに……。

### 3話(前書き)

十 主人公達の紹介十

明 あき

彰 あきら

愛美 あみ

中2 売春

高3

中

修司と付き合い中

愛美と付き合い

婦 売春夫

2 売春婦

高3

売春夫

中



### 3話

火曜日。

いつものように、子猫達にご飯と水をあげ、部屋を片付ける。

子猫ながらにして、暴れまくり元気で可愛い。自分も学校の準備をしなくてはいけない。隣の部屋に愛美と修司が住んでいる。2人は付き合っているらしい。最近売春をしてない。バイトをしているらしいが。隣もバタバタしている。私は、いつものように、洗濯物を干し、食器洗いをしゴミをださなくてはいけない。そーこーしているうちに

「ピンポーン」

彰が来た。

「明、入るぞ」

ヤバイ。まだ、制服着てねーぞ。

「明……………」

「何見てんのよ」

「そのタトウーなんだ……」

私の腕にはタトウーがある。イニシャルでH・Hと。

亡くなったヒロの事を忘れないようにとお店でもらった。ついでに、バツクに十字架を。

まだ、彰には話してなかった。昨日したばかりだったから。私には誓いが沢山つけられている。左耳に3つ程ピアスを。2つ程増やした。ヒロも3つ程開けていた。後、ミサンガとタトウー。

彰は、驚きと悲しみでいっぱい出て行ってしまった。今日はタクシーで行く。初めて見た。あの時以来だ。愛美と修司が嗅ぎ付けて来た。2人共彰と同じ反応で自分から訳を話した。中2から変わってしまった自分の事を全部。2人は泣いていた。そのまま3人で学校へ行き、サボって生徒会室へと向かった。

やっぱり彰もいて、4人で話し合った。

そして、結果は私達の恋人を殺した犯人を探そうと。警察によれば、金持ちらしくって、お金でどうにかしたらしい。刑事さんは、2人に謝った。一緒に泣いてくれた。連絡先も交換した。刑事さんは、同じ歳の子供がいたらしく、同情してくれた。私は感謝でいっぱい

だった。今でもたまに会って、子供さんと遊んだり買い物したりして仲がいい。

「見つけるってどうやって？」

「刑事さんにも協力してもらったらいいだろ？」

「修司、頭偉いね」

「まあな」

「連絡しとくな」

『ああ』

刑事さんだけには、今の状態と売春行為を教えた。怒ったが最後には抱きしめてくれた。初めて大人を信頼することが出来た。彰が電話で

「刑事さん？学校まで暇なら来て」

「ああ、授業は？」

「4人ともサボリ」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫だって」短い会話が終わり、来るのは夕方4時ぐらいだそうだ。それまで、インターネットで客を集めたり、家計簿をつけたり、遊んだりしていた。

### 3話（後書き）

読んでいただいたいて、ありがとうございます（<—>）感想な  
ど教えていただくとありがたいです。

## 4話（前書き）

衝撃の展開が！！

## 4話

4時30分。

刑事さんが来た。相変わらず顔がイケてる。30だと言つのに苦勞の面影すらない顔は惚れ惚れする。

「じんばんは」

「久しぶり、子供さん元気？」

「相変わらず元気だよ、それより呼びだした理由は？」

「話があるんだよね……。」

「エッチしてとか無しな（笑）」

「私達4人でヒロ達を殺した犯人を見つけようと思ってんだけど……。」

「……えっ？」

「だから、犯人を見つけるの!!」

「無理だよ、おまえらまだ学生だぞ？」

「じゃあ、警察が見つつけて逮捕してくれるの？」

「あれは、犯人がもみ消した事件だぞ？世間に発表したらえらいことになる。」

「それでも、見つけたい。だって、ヒロは私の大切な人だから」

「分かってるけど……」

「ねえ、お願い。誰が殺したの？」

「言いたくないのだが、そこまで言うなら言おう。そのかわり責めたり殺したりするな」

刑事さんは、真面目な顔で話を続けた。詳しい事まで。みるみる皆の顔が彰の方へ向けられる。



「犯人は、彰の父親だ。あの日、彰の父親は愛人とドライブしていて、よそ見をしていたら、車とぶつかった。それが、ヒロクン達を乗せた車だ。決して、ヒロクン達は、悪くない。2人のケータイのメールに遺書があつた。最後の力を振り絞って打ったから読みにくい。確かに明に向けた手紙だつた。読み終えた後、刑事達は泣いたんだ。そして、刑事達のケータイにヒロクンのメールが入っている。多分誓いなのだろう。あの事件を繰り返したくないと。皆も読むかい？」

「はい」

刑事さんにケータイを受け取り、見た。4人は涙を抑えて。

「明へ

俺、事故にあつた。

そのうちシヌだろ。

隣には彰君の彼女もいる、誕生日プレゼントを買いに行った帰りにこうなつた。

ゴメンな、俺、死にたくない。

まだ、明と一緒にいたい。

ネムイ、デモネムツタラシニソウデコワイ、明、愛してる。

死んでもズットアイシテル、指輪ツケロヨ。

アキラクンノカノジヨがアキラクンニアイシテルと伝えテホシイと言つてる。アキ、オワカレだ。アイシテル。ズットアイシテル、死

にたくないよ、アキトシアワセニナリタカッタ。ソシテ、アキトオ  
レトコドモデズットイッショニクラシタカッタ。イツモ、オマエノ  
コトヲミマモツテイルカラナ。アイシテル。」

長い文章だが、途中からは彰の彼女が打ったのだろう。最後には涙  
が止まらなかった。全員。

「ねえ、これって明じゃなく2人に当てた手紙だよね？」

「そうだな」

重い空気が流れる。彰は修司の後ろで号泣中。愛美は私の後ろで号  
泣中。彰は、ゴメンとしか言っていない。

私は、彰を腕の中へ押し込み、一緒に泣いた。刑事さんも泣いてい  
る、見たことがないぐらい辛そうな顔で。

「刑事さん、ありがとう。」

「こんな結果になってゴメンね」

「別にいいわ」

「約束、守れよ」

「ああ」

「じゃあな」

刑事さんが、帰って行った。残された4人はずっと泣いていた。

## 5話

その夜。

何故かは分からないが、3人が私の家に集まった。掃除を毎日しているせいか、綺麗つとか言われ、子猫を飼っていたことにもビックリされた。

「可愛いなあ〜」

「本当、兄弟なのに体格の差が激しくねーか？」

「でかい奴がボスの存在でちっこい奴が1番弱いから」

「大変だな〜、シー」

『ニヤ〜』

彰はシーと遊んでいて、修司はヒロと戦い中。愛美はチーとミーとフミと遊んでいた。その間に、小屋を掃除していた。そして、ご飯と水を器にいれた瞬間・・・

ドタドタ・・・

子猫がダッシュでご飯めがけて走って行くのを皆は笑っていた。

「皆、必死だな（笑）」

「でも、可愛い」

「子猫達の部屋広くなーか？」

5匹だから、小屋を2つ繋いだから、広くいっぱい遊べる。

「じゃ、話しようか？」

「そうだな」

私の部屋へ行き、地べたに座って、コーラを飲みながら話をした。

「これから、どうする？特に彰はキツくないか？」

「俺、家を出よつと思つ・・・」

「そうだよな、住む場所は？」

「明の家ダメか？」

「別にいいけど・・・」

「この際だから、プチ工事して部屋を引っ付けようよ」

「そうだな、明から言っというてな」

「うん」

「正直ビックリしたな」

「まあな」

重い空気が流れる。現実近づけば近づく程傷ついていく。

「明は、まだウリするの？」

「うん、高校になるまでは。それから、バイトしながら生活するよ」

「そっか」

「じゃあ、荷物まとめてくるから」

「ああ」

彰が帰って行った。愛美も部屋に帰り、修司と2人つきりになった。

「明、いきなりで悪いんだけど、好き・・・なんだ・・・」

「!!!!!!・・・誰のことを?」

「明の事・・・」

「愛美と付き合ってるんじゃないの?」

「愛美は、親友。実は、愛美も彰の事好きなんだ・・・」

「そんな事聞いてない!!」

「黙ってて悪かった」

「そうだったんだ・・・」

確かに愛美は彰のことが気になっていた。でも、修司が私のことを好きなんて気づかなかった。

「付き合えとかは、言わねーが傍にいていいか？」

「修司も辛くなるよ？」

「別にいい、ただ傍にいたいだけだ」

「分かった」

話が終わると2人も帰ってきた。多分愛美も話したのだろう。

「修司、どうだった？」



「傍にいただけならOKだそうだ」

「私も、同じく」

彰も私と同じく告られ、断ったのだろう。

「じゃあ、ぱーっと喰うか？」

「明が料理上手だから、作って」

「はいはい」

こうして、終わった。だが、誰も彰が明の事を好きで明はヒロの事を愛しているとは気づかなかった。

## 6話

土曜日。

彰が来てから家事は楽になり、仕事もあまり土日は入れないようにした。

貯金が1000万近くあり、別にやらなくてもいいが、今の客から金を絞り終えるまではやらなくてはいけない。彰も親から毎月50万近い金を送られ、彰も自分と同じ考えだった。暮らしてみても、部屋は広くなり、彰も可愛く見えた。ヒロと重ねて見てしまい、夜になると酔って、彰に抱き着いて寝ているらしい。

夜

「明、飲みすぎるなよ」

「分かってるよ」

しかし、自分でも分かるくらい酔っていた。目が霞んでよく見えな  
いが、目の前に愛しいヒロがいた。涙が溢れてきた。なぜ目の前に  
いるのだろう？なぜ悲しそうな顔なの？私は、彰をヒロと間違ひ幻  
覚に襲われていた。

「ヒロ、私寂しいよお」

自分でも分からないが、本音をおもいつきり話し出す。彰は、気づいている様で、また悲しそうな顔をする。自分は気づかず、そのまま話すとヒロ（彰）も話してくれた。

「ヒロお、私修司って言う先輩に告白されたんだあ、でも、私はヒロの事を忘れられないまま引きずって、自分を傷つけて汚れて私ってヒロがいないとダメなのかもしれない」

「明、そんなに辛いなら他に好きな人を作れ。そして、俺のように愛せ」

「嫌。だって、怖い。また、ヒロみたいに消えちゃうのが怖い。私、ヒロといて本当良かった。だから、もう1度だけ言って？ずっと愛してるって」

「愛してる」

抱きしめられ、我に返った。ヒロの匂いじゃなく彰の匂いがした。しかも、泣いていた。

「明、いい加減気づけよ。俺、明の事愛してるんだ」

正直彰がこんな事を言うとは思えなかった。最悪にも、修司と愛美がドアの前で固まっていた。最初から居たようだ。2人は、隣の部屋へ行った。そして、このままいつものように一緒に寝た。

## 7話

次の日。

朝から、気まずい空気だった。昨日は、酔っていたが、ほとんど覚えていない。

「彰、おはよう」

「おはよう」

昨日の事は覚えていないようだ。

「昨日のこと、返事は？」

「あの……告白？」

「ああ」

覚えていたのかよ。

「私、まだヒロのこと變じてるから」

「そうか……」

いかにも、彰は落ち込んでいる。今日は、仕事だから行かなければならない。今回の客は、多額を出してくれる若手社長だ。

「仕事行ってくるからご飯食べよ？作ってるから。昼戻る」

「行ってらっしゃい」

私は、待ち合わせの喫茶店で待っていた。以外に客が少なく静かだった。

「お待たせ、待った？」

「さっき来たところ」

「じゃあ、前金」

「ありがとう」

封筒の中には福沢諭吉が10数枚。この後、スポーツカーに乗り、自宅へ行き一仕事終えた。11時くらいだった。

「今日もありがとう、また来週」

「うん」

自宅まで送ってもらい、帰宅。財布の中は18万入っていた。それ+前金で30万は越す。社長ってすごいなと改めて思った。

「おかえり」

「ただいま、彰も終わったの？」

「うん、愛人だからたまにしか会わないし、1時間ぐらいで終わるからね」

「そっか、子猫達に餌あげた？」

「うん、水も」

「そっか」

何気ない会話が終わった。昼からは1週間分の食料と新しい服と雑貨などを買った。

修司達には、会わなかった。何故だろうとは思ったがそんなに考えていなかった。2人が自殺したことになんか気がついていなかった。



## 8話

月曜日。

学校の為2人を迎えに行くところには変わり果てた2人の姿があった。

すぐにサツを呼んだ。

前、会った刑事さんにも連絡を。

数10分もしたら、そろそろとサツ達が部屋へ入っていた。

修司は、首に傷があり手には包丁が握られていた。

愛美は、風呂場で手首を切り死んだ。

サツは、自殺と判断したが、私と刑事さんは納得がいかない。遅れて、彰も来て驚いていた。自殺をする理由なんか分からない。今日は、学校を休み、彰と刑事さんと私の部屋で話した。涙は、何故か出なかった。だそうとしても、出なかった。自分自身、これで2度目ですごく涙は捨てた。彰も同じだ。枯れるほどないから。

「彰達は、何か知らないか？」

「知ってたら、もう言ってる」

「私も。最近売春行為も辞めたし、恨まれることはしてないよ」

「危ない奴か、客だったとかは？」

「うーん……」

一生懸命考えたが、客の話なんかしたことなんかない。

「分からないな……」

「もしかしたらだけど、俺の親父かもしれない」

「本当か!？」

「ああ」

忘れていた。彰の親父は愛美の客だった。

「もしかして、愛美が刑事さんが話した事言っちゃったのかも」

「有り得るな……」

「でも、どうするの? 今回の事は自殺って判断したし、どうする事

も出来ないよ」

「そうだな、いつその事雑誌社に言って記事にしてもらったらいんじゃない？」

「でも、学生の話なんか聞いてくれる人なんていないよ？」

「知り合いにいるから、大丈夫」

「そうなのか・・・、だが彰も辛い思いをするぞ？」

「いいんだ、戸籍を抜いたから俺にとってはただのオヤジだから」

「そこまで、したのか」

「ああ」

1時間後、刑事さんが帰り、2人つきりになった。話すことなく、気晴らしにショッピングセンターに行き、衝動買いをした。

「彰、大丈夫？」

「ああ、昨日の客から200万ぐらい貰ったから欲しいの買え」

「彰は、欲しいものないの？」

「明の心が欲しい・・・」

「バーカ、何言ってるの？」

「俺は、真面目だ。後、彼女とは別れた」

「そうなんだ・・・。別にいいけど、私はヒロ以外愛さない。誓ったから。好き以上はないから」

「分かってる。好きになってくれるだけで俺は救われるから」

「そっか、ありがとう」

私は、彰に悪いことをしている。現実的には、もっと可愛い子だつて、沢山いる。それなのに、こんな私を選んでくれた。感謝でいっぱいだった。私は、夢を見ているのかな。ヒロ以外の人に優しくされたのは初めてだった・・・。

ヒロ・・・

私、まだヒロの事が好きだよ？

ずーっと愛してる。言っただろ？私は、お前のものだって。だから、ヒロは幸せになって下さい。私は、汚れてしまい、傷だらけの私を忘れて下さい。そして、生まれ変わって、もう一度綺麗な身体に触れて下さい。もう一度愛してると言って下さい。もう一度、もう一度だけ・・・

「明はとても綺麗で、俺のものだ。ずーっと離さない」

と言って下さい。

私は、ヒロがいないと、死んでしまいそうなのです。誰かの肌に触れていないと、ヒロの事を忘れられないのです。だから、生まれ変わったら私と結婚して死ぬまで一緒にいて下さい。

9話(前書老)

最終回!!!

## 9話

あの事件から、1週間。

彰は、傍にいる。変わった事は売春を2人とも辞めた。彰は、高校を辞め、整備士の資格を取り、整備士になり、私は中学校生活を続けていた。

私は、ふと気づいた。

彰の行動全てがヒロと一致する。難無く整備士になれたこと。ヒロも整備士だった。納豆とピーマンとキノコと茄子が嫌いな所、子猫がすぐに懐くこと、私の好きな納豆チャーハンを作ってくれたこと。教えてないことが全て彰によって暴かれていく。何故？彰は知っているの？試しに実験してみた。

「ヒロ、愛してる」

「当たり前だ、明は俺のモノだし結婚を約束した仲だからな」

あの日以来聞けないはずの単語が彰の口からスラスラ出てきた。結婚をするのを教えたつもりはない。あれほど私はモノじゃないって言ってるのにモノって言う癖。何故？私は、涙が溢れた。何故いはいはずのヒロがいるの？

何故か分からないが彰は慌てている。

「明帆、さっきのは冗談だよ」

「何故彰が私の本名を知ってるの？知っているのはヒロだけだよ？」

ビックリした。久しぶりに本名で呼んでくれて嬉しかった。

「あのな、これはそのー……………」

「何があつたの？」

「実はな、あの日明帆の誕生日に指輪を買って帰ろうとした時、知らない車が突っ込んできた。そして、目を開けたら知らないおじさんが」

『お前を生きかえさせてあげる。その代わりに、ずーっと明の傍にいろ。お金は、毎月通帳に入れとく。その金はお前をひいた奴の給料からだ。バレル事はない。分かったか？お前は、今日から彰として生まれかわる、詳しいことは部屋に置いておくから』



と言って目がさめたら説明書に彰と言う人の事が詳しくかかれていた。

と言う訳。正直ビックリしたよ。だって、明帆が売春婦で俺もだし、しかも客だったしバレたらどうしようとか思っていたらバレちゃった。それに、お前の身体が傷ついているのになんも出来なくてゴメンな」

そして、抱き着いたと同時にヒロの匂いがした。身体も顔もヒロのモノへ。私の身体もタトウが消え、ミサングもピアスも消えた。

「明帆、これからはずっと一緒だ。」

「うん」

「明帆、愛してる。明帆は俺のモノだし結婚を約束した仲だ」

「うん」

その言葉を聞いて、ヒロに抱き着いた。いっぱい泣いた。

「明帆、ゴメンな」

「いいよ。こうして、戻ってきてくれたから」

「結婚しよう」

「うん」

明は、18になりヒロと結婚した。双子が生まれ幸せに暮らした。子猫達は、大きくなり 2匹が出産し、10匹も子猫が産まれた。

マイホームが欲しいと思いはじめたらヒロが血相を抱え走ってきた。

「通帳見てみる」

そこには、1億と記してあった。その1億ででかい家を建て、幸せに暮らしました。

「彰、修司もう1人家族が増えるぞ」

「やったー！妹？」

「そつだぞ、愛美って言うんだ」

「可愛いね」

私は、3人の子宝に恵まれ、幸せに暮らした。1度だけ神様に会い、3人ともお前の学生時代の友達だからなっと言われた。あの時のダチに会えるなんて嬉しかった。また、全員で遊ぼうね……

「ご飯だよお」

「はい、今行く」

ヒロと子供達が勢いよく向かってきた。あの学生時代を思いだした。  
・・・

(完)

## 9話（後書き）

番外編も書きますので！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4887h/>

---

愛しい人

2010年10月14日17時15分発行